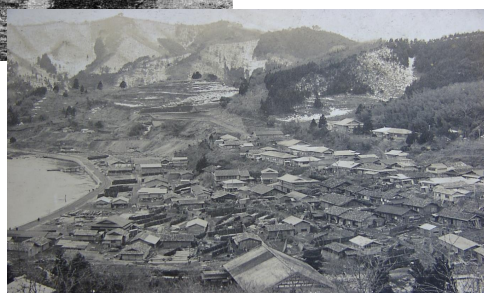
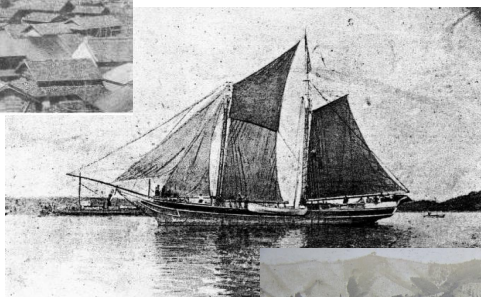
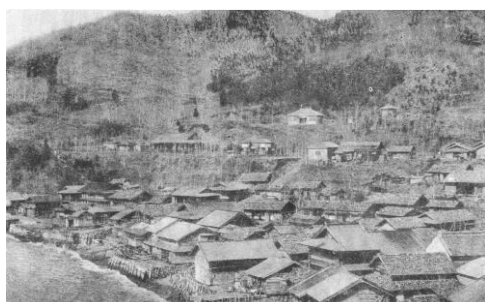


唐丹の民話・16話「小白浜地区」

こ じ ら は ま
昔の小白濱に

想いをはせて



平成19年12月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

目 次

—昔の小白浜に想いをはせて—

唐丹民話の再話著作にあたって	2
1. 小白浜の地名の由来	4
2. 小白浜の遷り変わり	5
(1) 気仙第一の宿駅	5
(2) 明治29年「端午の節句」に大津波襲来	5
(3) 救世主千歳丸の進水	6
(4) 「局の坂」 界限は、一番の繁華街	7
(5) はやり出した千歳丸を迎える唄	8
(6) 小白浜二番目の繁華街は	8
(7) 海上交通の夜明け	9
(8) 大正2年、大火の被害甚大	9
(9) 昭和8年「桃の節句」に、またもや大津波襲来	10
3. 日和見の基地は雷神様	11
4. 町の長老たちのよもやま話	12
(1) 大正2年の大火と昭和8年の津波の状況について (参考)	12
(2) 日和見について (参考)	12
5. 昭和8年津波前の小白浜略図	13～14

唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関りかつ再話できるものを選び、その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」「読みやすく」「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入し、できるだけ関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いと思います。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの「民話を伝承したい」と言うこの熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となりました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「昔の小白浜に想いをはせて」は、釜石民話第3集「昔の小白浜」を再話著作したもので、その原文は次のとおりであります。

小白浜は小城浜と書いたようです。小さい伝城と云う城があったから、とも云われているようです。

漁業が盛んで「かつを節、かまぼこ」などの製造が盛んで、塩釜、気仙沼、石巻などとの交易が盛んで、衣料・米・野菜は宮城県から来たようです。製材所もあり、旅館・小料理屋なども4、5軒あったと云うことですが、明治29年の大津波で壊滅的に流されても復興し、明治41年には、三陸汽船会社と廻送店が設立し、仙台、塩釜、石巻、気仙沼と航路をもうけて航行し、鉄砲撃ちの時節には鳥獣をとりに来る人が大勢きたり、また衣料品を卸にくる。米、野菜をもって来るなど商売人が出入りし、こりゅう、月船、千歳屋などの遊郭・カフェー・朝日などもあったが大正2年鍋倉山からの山火事が延々と唐丹まで燃えてきて、小白浜は3軒残っただけ、それでも立ち直り栄えたが昭和8年の大津波で現在の町並みの下方は全部流され、女郎屋のおかつばあさんも其の時に亡くなった。亡くなったのは3人ぐらいだったが、其の後は戦時色も増してきて、物資が統制され遊郭・カフェーは姿を消してゆき、明治時代の繁栄はなくなり現在に至ったと云うことです。

旧道、小白浜・本郷の山道をゆきますと、今も雷神様を祀った神社があります。そこで、昔は天気予報もないように「今日はてんきえですよ」と白い丸いものが上がる。板でできたものか布なのか解らないそうですが、雨には黒いもの、嵐には赤いものとかわるがわる上ったもので、それがあたったものだと云うことです。それを上げた人も今は亡くなり随分聞き歩きしましたが、それをおぼえている人も数少なくなりました。

川原 セイさんの話

昔の小白浜に想いをはせて

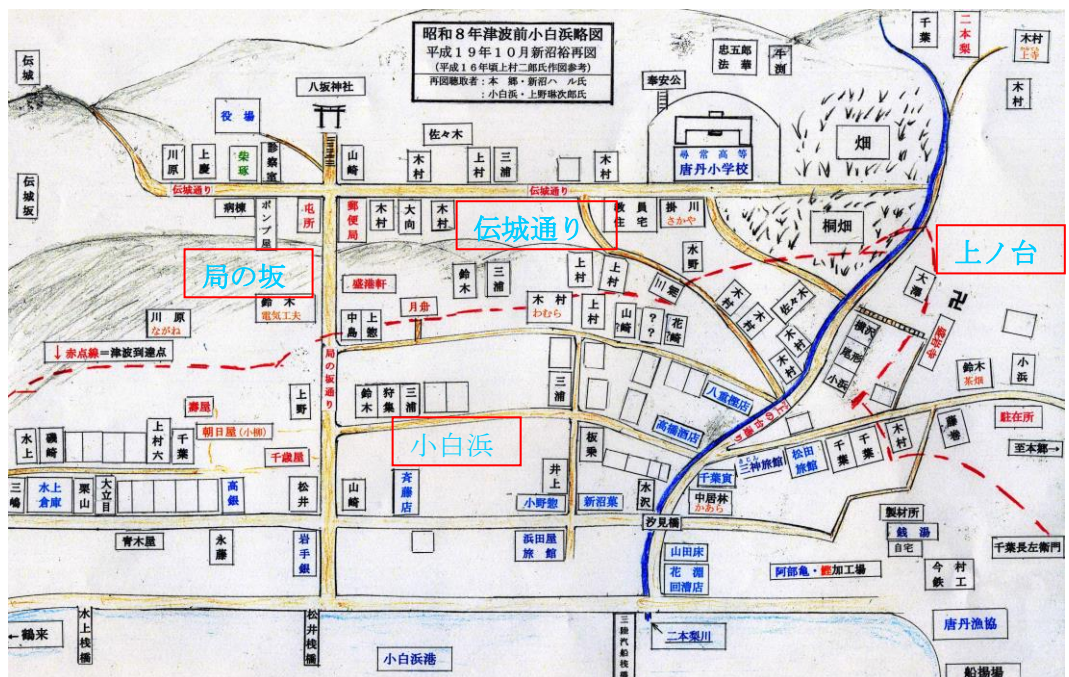
1. 小白浜の地名の由来

封内風土記では、古城祉があるから古城浜というのとあります。又、小さい伝城という城があったから小城浜という。とかと諸説があります。



(小白浜の町並み盛岩寺方面よりの眺望・昭和9年3月/新沼信氏所蔵)

近いところでは、明治以降は、大きく3地区に分けられて呼称され、二本梨から南の中央通りを「伝城」、二本梨から東の方一帯を「上ノ台」、伝城下の海岸地帯を「小白浜」といいました。



(昭和8年津波前の小白浜略絵図)

これは地籍の字名にもあり、戦後、昭和30年の町村合併以前に、この3地区名を「小白浜」と統合呼称するようになったといわれています。

2. 小白浜の遷り変わり

(1) 気仙第一の宿駅

小白浜は、宿駅（昔、街道の要所にあり、馬・人足・かごなどを仕立てることが



(宿駅の想像図)

出来た所＝宿場)で発達した集落で、寛永・生保期や嘉永(幕末)期の小白浜宿の戸数(75と151)は、代官所所在地の今泉村宿(60と128)より多く気仙第1を占めています。

この唐丹は、四方山と海に囲まれ地勢状から海陸両面か

ら極めて不便な所です。

しかし、気仙郡の北陸にありながら、豊富な海産と林産に恵まれていたため、気仙北部の交易の中心をなし、海や陸の交通や交易で賑わった宿駅であったと思われます。

(2) 明治29年「端午の節句」に大津波襲来

こうした事を後ろ盾に発展してきた唐丹地方は、藩政時代において大小の津波15回を数え、凶作、飢餓などにも遭ってきました。

そして29年の大津波に壊滅的に流されてしまったのです。

その時の状況は、6月15日夜7時32分、地震発生、震源地は三陸沖から200kmマグニチュード7.6

とかなりの規模でしたが、三陸沿岸から距離が遠かつ



(明治29年大津波の被害に絵図/釜石資料館所蔵)たこともあり、震度2～3程度と軽い揺れを感じた程度で、特に被害もなかったのです。

家々では、たいした地震ではないと、端午の節句や豊漁、日清戦争凱旋の兵士のお祝いなどで宴たけなわでした……。

そのさなかの午後 7 時 5 0 分頃、海水は異常な速さで干退し、同時に遠



雷のような響きが聞こえた後。そこに、突如押し寄せた山のような津波は、その団欒を一瞬のうちに地獄絵図に変え、人々は逃げる暇もなく、住家もろとも闇夜の海に呑み込まれてしまいました。

(磯崎富右衛門さん倉庫開放被災民救済の絵図/釜石資料館所蔵)

その小白浜の被害状況は、津波の高さは唐丹一番の 16.7メートル、総戸数は 113戸中流された戸数は 102戸、死亡した人は 460人で残った人は 164人でした。

(3) 救世主は「千歳のダンナ」

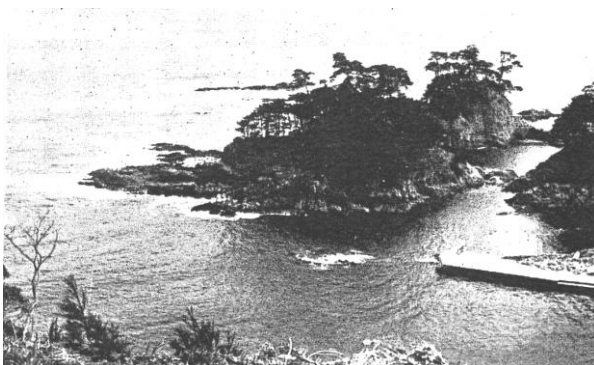
小白浜は、人家も少なく寂しい港であり、ことに明治 29 年の津波で大きな被害を受け寂しさが一層ひどかった……。

この頃まで、隣の吉浜村千歳の水上助三郎さんも、革新心に燃えいろいろな仕事を手がけた。また、親や親戚の反対を押し切って船を借り、ラッコやオットセイ猟にも手をだしたが、どれも、これもことごとく失敗に終わったのでした。



(昭和 8 年津波前小白浜/盛岩寺寺報より引用)

しかし、これで挫ける水上助三郎さんではありません。水上家の家運をかけ、明神さまに祈り願い。遠洋漁業奨励法について国に働きかけるなど頑張りました。



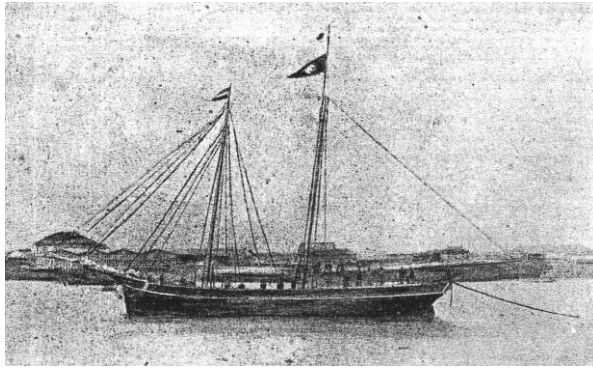
(千歳海岸の風景)

それらが功を奏し、また多くの友情にも支えられ苦難を乗り越え、明治 30 年 10 月大石の屋形で、念願の第一千歳丸 (74 トン) を進水させ、その第一千歳丸の猟などを成功させ。

明治34年には、第二千歳丸（84トン）を越喜来の泊で進水させました。

助三郎さんと斉之助さんの兄弟は、第一、第二千歳丸に別々に乗り、小白浜港を寄港地にメキシコ方面などへ行きラッコ猟などで競い稼ぎまくりました。

小白浜に帰った兄弟は、「千歳のダンナ」「小白浜のダンナ」と呼ばれ、



水夫（カコ）たち共々凱旋將軍のように村人から迎えられました。

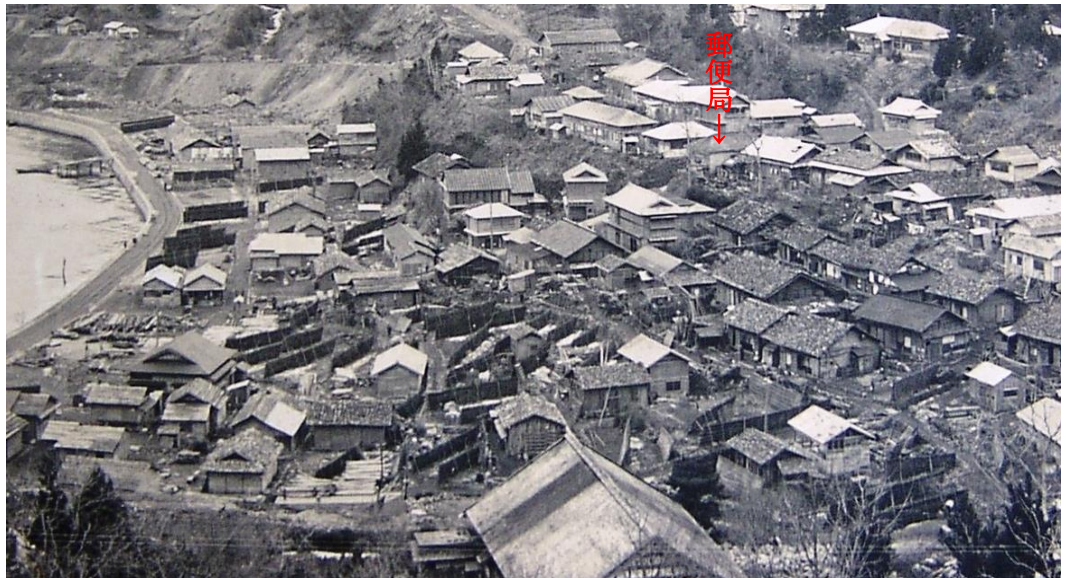
水夫の勘定も100円、200円と大金で村人を驚かせ、羨ましがらせ……。当時の吉浜、唐丹地方の男にとっては、千歳丸に乗り込むことが憧れで、乗れば「男の名誉」であ

（第一千歳丸/水上助三郎伝より）

り、「誇り高い」ことであったそうです。

（4）「局の坂」界限は、一番の繁華街に

千歳丸以来にぎわった小白浜港を反映して、「局の坂」の付近には、千歳丸からとった名の千歳屋やことぶき、盛港軒、朝日屋（後に小柳）、月舟などの遊郭・カフェー・飲み屋が建ち並びました。



（昭和9年3月小白浜一番の繁華街/新沼信氏所蔵）

さらには岩手銀行や小白浜一大きい斉藤雑貨店や小野惣商店、浜田屋旅館、新沼菓子屋が軒を連ねて、ここは小白浜の繁華街でもあり、歓楽街でもありました。

(5) はやり出した千歳丸を迎える唄

千歳丸が小白浜港に入港すると方々から芸者さんも集まり、見物人もつめかけ、一夜にしてにぎやかな町にかわるのでした。

また、誰がつくったのか千歳丸を迎えるために、「千歳丸の唄」もはやり出し、

♪沖にちらちら航海ランプ

はやくおいでよ千歳丸

千歳丸なら命もやろが

ほかの船なら気もやらぬ

どこえ行くのかハンタさん

つれて行かせい海豹島へ

つれて行くのは山々なれど

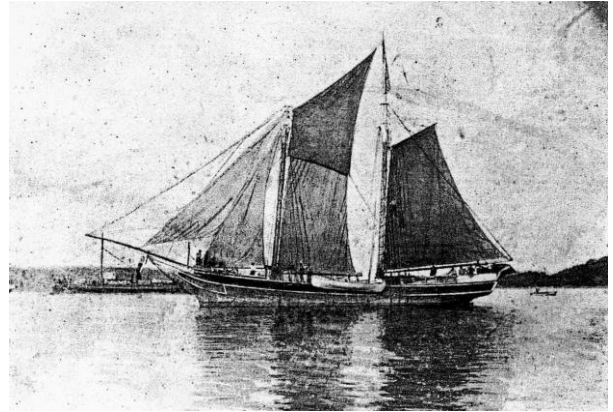
女は乗せない千歳丸

泣いてくれるな出船の前に

沖で櫓權が手につかぬ

遠くはなれて逢いたい時は

月が鏡となればよい♪……と、老若男女に唄われたそうです。



(第二千歳丸)

(6) 小白浜二番目の繁華街は

「局の坂」に次いでにぎやかな通りは、花淵の回漕店、山田床屋、千葉寅商店、高橋酒店、八重樫商店、松田旅館、銭湯屋などが軒を並べ、二本梨川の川口付近から海岸周辺と盛岩寺方面に上がる坂の通りだといわれました。

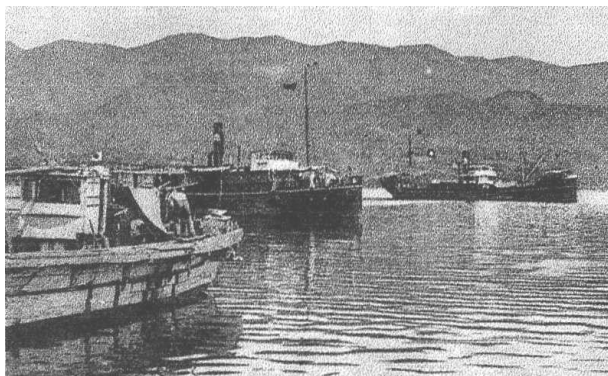


(昭和9年3月小白浜・上ノ台方面の眺望/新沼信氏所蔵)

津波後は、地元の人達みんなの懸命の努力で立ち直り、漁業も盛んになり鰹節、かまぼこ等を作る加工場や製材所もあり、製材所では銭湯を営み飲み屋の女中さんなどで繁盛したそうです。

(7) 海上交通の夜明け

明治41年4月には、三陸汽船会社と回漕店が設立。塩釜と宮古間の定期航路が開かれ小白浜が寄港地となり、栈橋が架設されたが汽船は、横着け出来ずに50メートルほど沖に停泊し、ハシケで人の乗船・下船や荷物の積み降ろしがされました。



(三陸汽船・大正時代の大船渡港/市役所蔵)

この仕事に唐丹の人達も携わり、さ(屋号)の爺さんが元気で声もよく荷役の声掛けをするなど港は活気にあふれ賑やかで、回漕店の取り扱いには花淵俊英(川原セイさんの父)さんが営んでいました。

一方、三陸汽船と並んで津波前の昭和の初期から、小白浜を中心に唐丹湾内の各港をめぐる釜石までの巡航船が、山崎善祐さんをはじめとする2〜3人の人達によって経営され、国鉄の大船渡線が開通すると、細浦まで巡航船を運航しました。

こうした事により気仙沼・塩釜・石巻等の交易が一層盛んになり、衣料品や米や野菜は宮城県方面からも来ました。

また、衣料品の卸や米や野菜を売りに来る商売人、秋から冬の鉄砲撃ちの季節には、鳥や獣を撃ちに来る人など多くの人達が出入りするようになりました。

(8) 大正2年、大火の被害甚大

4月頃になると県下一帯の牧草地は「火入れ」と称し、枯れ草を焼いて新しい草を繁生させるのが常例で、これを俗に「野焼き」といっています。

(鍋倉山周辺→)



唐丹では、鍋倉牧場に3月31日に火入れ、夕刻から五葉山方面より強い風が吹き牧場以外にも燃え広がりましたが、この延焼を一応くい止めました。



(山火事の想像図)

ところが、夜半から烈風が吹き、残り火が燃え上がりたちまち火の海となり、小白浜・本郷まで炎々と燃え広がりました。

小白浜は、総戸数150戸、焼失戸数141戸、総人口681人、死亡者14人と大きな被害を受けました。

(大正2年4月1日大火の詳細は、

別冊「竜神様」の再話編「本郷・大曾根の宇賀倉さま」を参照してください。)

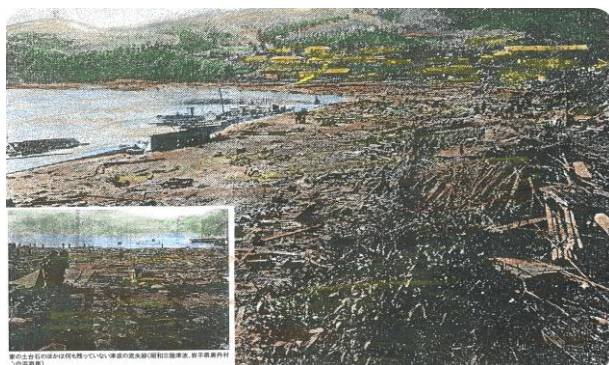
その後、村も再興その当時の旅館は、浜田屋旅館と松田旅館と三神旅館などでした。

浜田屋旅館は、汐見橋近くの海岸にあり、海の上に出し屋を造り、その床下を波が洗い風趣に富んでいたそうです。また松田旅館は、盛岩寺前に大きな構えをとり、官公諸団体役員が常宿した所と言われ昭和8年の津波前までは人の出入りもあり賑わいました。

港は大正初期までの千歳丸の賑わいの後も、漁船の出入りが多く、夏が近づくと土佐（高知県）房州（千葉県）方面から鰹船が餌にする小鰯を買い求めて回来し、水夫が町を闊歩するなど、昭和8年の津波までは賑わいが続き立ち直り栄えました。

(9) 昭和8年「桃の節句」に、またもや大津波襲来

明治29年の津波から37年後、またしても大津波が襲来。小白浜は、



(小白浜津波被害の惨状)

局の坂の下半分位の高さの町並み全域をほとんど流されました。

その時の状況は、3月3日午前2時31分「地震発生」震源地は三陸沖約200km、マグニチュード8.3で北海道から本州の大部分で揺れを感じた大地震でした。

三陸沿岸では震度4～5程度の強い震度を感じ石垣が崩れたり、釜石の町など一部で火災が発生する被害がでたが、特に大きな被害とはなりませんでした。

しかし、それから30分ないし1時間後、約1mの大津波が襲来し大小4回も繰り返したといいます。

津波の前兆と思われる「井戸水が枯れた」「鰯の大群が海岸に殺到した」「発光現象があった」「ドーン、ドーンと大音響がした」などがあったそうですが、それを減災に活かすことは出来なかったようです。



(昭和8年3月津波の惨状跡をさまよう小白浜住民等/釜石資料館所蔵)

その小白浜の被害状況は、総戸数160戸、被害戸数104戸、死亡6人、行方不明4人、負傷者数6人でした。その時千歳屋のおかつばあさんもなくなりました。……合掌

その後は戦時色も増して来て物資が統制され遊郭・カフェーは姿を消して行き、戦時色も増してきて物資が統制され遊郭・カフェーは姿を消して行き、明治時代の繁栄はなくなり現在に至っています。

(釜石市誌と歴史の道・浜街道上巻および本郷津波検証の集い、

水上助三郎伝より一部引用)

3. 日和見の基地は雷神さま

浜街道(R45に対し旧道)を小白浜から本郷方面に行きますと、桜峠の頂上(高さ約80m)付近に通称「二つ神さま」と呼ばれる所があります。

左側の山の上にお薬師さま(菅原神社とも言う)を、右側の山の上には雷神さまを祀った神社があります。



(お薬師さま)



(雷神さま)

昔は天気予報も無いので、その雷神さまの所で天気情報を知らせていたそうです。



(二つ神さま方面・片岸海岸からの眺望)

板で出来たものか、布なのか分からないが、天気が「良いと白」の丸いものが揚がる。「雨には黒」、「嵐には赤」のものが揚がったそうです。

それを揚げた人も今は亡くなり随分聞き歩きましたが、それを覚えている人も数少なくなりました。

どんとはれ

4. 町の長老たちのよもやま話（参考）

（1）大正2年の大火と昭和8年の津波の状況について

大正2年鍋倉山からの大火災では、火を逃れようと小舟で海に非難した、柴琢治氏の妻や子供らを乗せた舟が転覆し亡くなっている。

昭和3年～9年遠洋漁業でメキシコに唐丹から20数名位が行っていたが、昭和8年の津波が遭ったということで家族を心配し9年頃、上野巳代之進・千葉長七・寺崎万之助さん等がもどってきた。

小白浜／上野琳次郎さんより（再話著者）

（2）日和見について

大正末から昭和の初めの2～3年頃、小白浜の回漕店付近から雷神さまの方を見ると布の旗が揚がっていて、天気を知らせていた。

かなり高く見えたので、柱に揚げていたと思う。それを管理していた人は、小白浜の小浜さんの近くに住んでいた菊池さん？と言う方だと聞いたことがある……。12～3歳の頃の記憶

本郷／新沼ハル（93歳）さんより（校正者）

4の（参考）の項、おしまい

[illegible]

この略図は、平成16年頃上村二郎さんが作った図を参考に平成19年10月に再作図したものです。再作図にあたって確認の聴取した方々は、本郷地区・新沼ハルさんと小白浜地区の上野琳次郎さんです。

なお、この図は、「昔に想いをはせる」ために概略を見るためのもので正確なものではありませんことを申し添えておきます。

5の（参考）の項、おしまい

◎釜石の民話・第4集：昔の小白浜

○話 し 手：川原セイ／小白浜

○聴 き 手：加藤ムツ／片岸

●再話著者：上村年恵／片川地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●写真撮影者：上村年恵（同上）・新沼 裕（同下）

●校正指導者：新沼 裕／本郷地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●再話完成：平成19年12月